赤穂義士書

和装本
ケ5
44
1650

有徳院様御代ニ作出ス

步鞦之覺

一馬之毛色上様ニ遲速勿論可掛事

一祭人も可掛事　但紫束ハ常ニ通り

一鞦奉行者人左右ニ居　但乃徒目付

一鞦目附者人左右ニ居　但市庭方ニ

附り鞦ものゝ　なし

一大鼓弦役所坊主弐人　但右鼓ハ白方弦ハ赤方

一日記役市屋方壱人　日記諸役書ヶ

一帯人ハ御小姓元中奥元御小納戸元

一鉄つの尺所ニ而ハ横九尺

但大方ハ弓杖長サ

一中門の尺八九尺鉄門の尺ニ而廣

狭あるべし

一鉄門ハ弁ニ而四本柄ニ立

但二本立ニ而ハ事もあり

一鉄門内ニ立る幕ハ壱丈弐寸の竹ニ

はしら先ニ立て赤白弐本

赤白弐本あり

一徒振幕ハ長サ弐尺弐寸赤白弐本

但赤黒のぶたい柄ニ三尺弐寸と

ちゝ常ニ通り

一鉄ハ草ニ而大サ如ニ壱尺壱寸廻り

赤白にて柔人を一口宛に積り
ふらべ相い結ぶの通り

一鞭杖長サ弐尺五寸外
但鞭の竹より余し長さ
五寸

一鞭先相い極能き位に入ふらべの場所へ
持ツ

一若前方の節いつ間に貴屋に進ル門前の

対い迄一廻り柔ふ大ふり

一赤白の鞭一時より鞭つを入大ふ勢徳凱奇
早き方帯早く振ふる方徳之帯
役ふ働きナ一大ふり

一市庭い廣所場揚ふを知ふ大ふ
馬場七十間ふらばつの間ふ宜ふ
すべ相白のすふり馬立の麾

まで之日弱馬より越迄三番越か
越まて九尺〳〵こすぐ〳〵越を十ヶ並
角て弓数十ヶ所に成へ残り四十
計りまて門内の弓数なり百番
小あも百年弓をとを門内をを
きくすへ〳〵

日記語抜こ事

弁越日記

一番　白方御勝　赤方　御　誰　誰　誰　誰
熊野河内弓　誰　誰　誰　誰

二番　白方　赤方勝　御　誰　誰　誰　誰
熊野河内弓　誰　誰　誰　誰

三番　白方御勝　赤方　御　誰　誰　誰　誰
熊野河内弓　誰　誰　誰　誰

四番　白方御勝　赤方　御　誰　誰　誰　誰
熊野河内弓　誰　誰　誰　誰

以上白方御勝

月　日

一馬數拾弐疋
但し時々の
所物數多増減
有之事

一右之通出し立て置へもらひに
時越奉行相屋乃屋敷へ立寄
馬に乗り換を仮とり寄とも申し
掛ると云て所出しの相屋の屋敷

を出すと皆々馬道より地道へ
乗出し而乗行目前の幣の石
ゝく馬を引ると通り立て仮を
下ルを見て此方へ相屋の屋敷
越目附振をとって場馬より陸
へとをけ出し乗出し而乗越を
請次第に越つゝ入ル毎に入

たる者ばかりにて穢つゝ入り来るを
則元方の幣を上ふる是初入来る
多柄之義穢つの初是入来る弱い
中つゝ来ることみを浦曲を穢つの
そゝくそゝぎ出し是来すへ若白
方へ赤穢赤方へ白海の入れる
時来敵方穢を取ると称す

なる称よ馬を乗過て行くさるゝ
勿論敵方穢り漳れ支あき宮之
赤白四条に相成

一穢の宮りする数皆入た弱元方北
敵弱内を学て穢奉行穢目付
来人と云て勝凱歌を揚れなる
元時来人い穢枝を振り上るゝら

越つゝ立ち迄馬氏より弓張馬氏
立ち迄勝凱初を揚勝振幕
と立揚つの三番つ打出居る但
略して相こゝる事も有り頂方ハ
揚凱初の洲よりて初居る勝凱
初の洲と越事ハ若景の廣子氏
如此見氏ゝ立ち初ゝ馬道ゝ

立迄順こゝ立ち迄こゝ　相太鼓役弧役
越迄拾八番目ハ入目外ハ洲より目附
見氏えのゝ立ち並る事より武番目
初メ揚馬を立ちつる者ハ牙二端目
の者氏揚出ハ三番目ハ三端目
四番目ハ四端目ハ氏ゝ五番目
勝頂次つる相馬氏ゝて揚の吹を

紙に各様を上に揃えて
奉行所へ
馬鞭を持て門内へ献味方馬を
入遣たひに献の為に出
門前へ又馬を入遣ひ前のごと
俵紙を立る次第右同様四畳敷
元の所へ馬を立並へ除て居て

順次紙に雪ふれる為より地道へ
京出に一畳目の通り目当の幣
まて付き毎方二行みなら居て
おり立出厩方に居ることを
勝方乃者
御前へ出る時
上様御目録を賜り出て双載

の時長槍を脇に立て敵陣の
元へ駆り寄せ馬にのりえのる筋
を通り越つゝ入り馬屯する下馬
一礼して此時い法るを法馬屋方へ
渡し退之負方の者い目當の帯
ゆるく下る勝方乃鎧乃裏海て
法より自分馬を乗えのる通り

駆り寄せ入御厩方へ
渡し下る屋敷へ退なり

退加

一當御代ていハ裏表とゝ一幅巻りよ
深ゝ巻り巻ハ織ていて法 但ハ 白い 紫と 白に染ん
赤い 赤と 紫に染ん

一下い常に通行大なり

一笠い何ぞ[illegible]て云ふ作升事

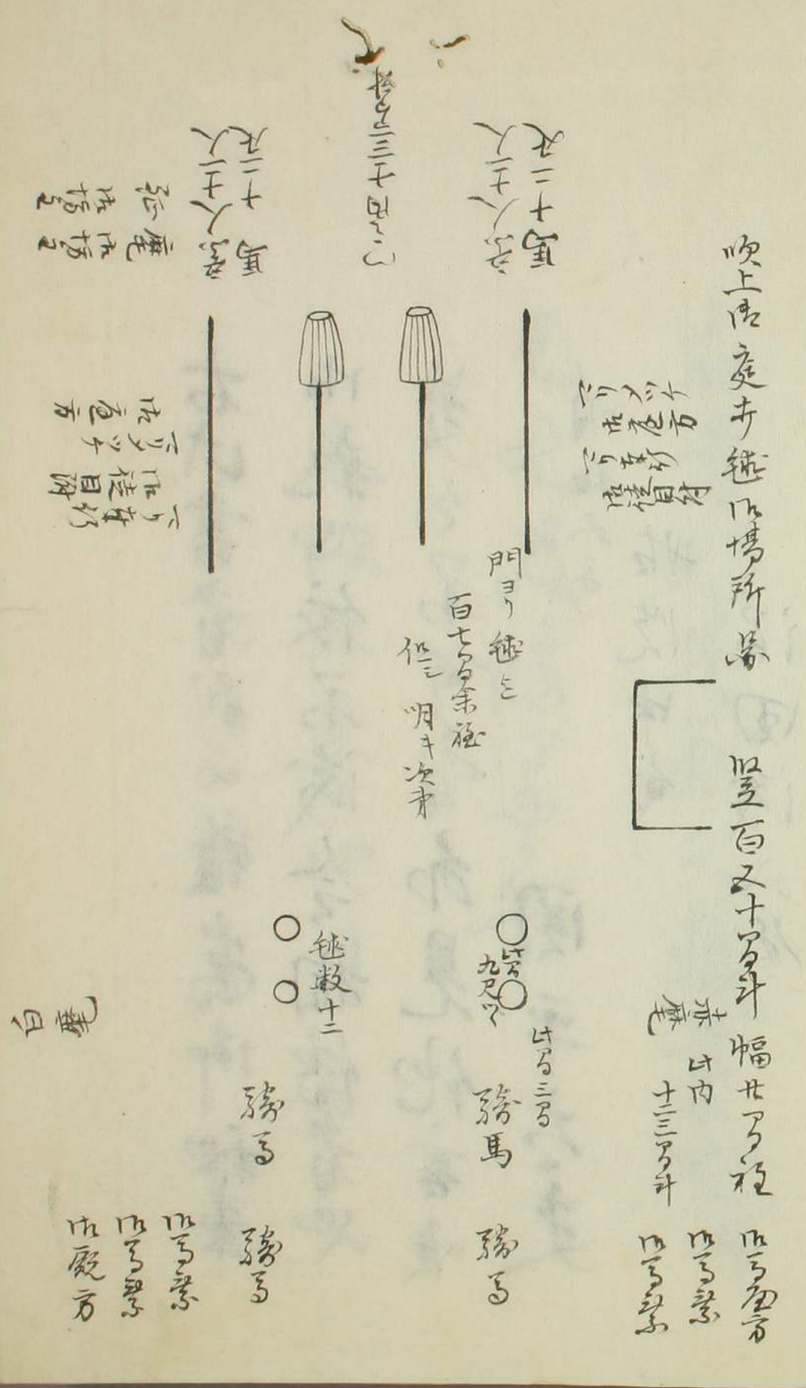
一御庭い廣き内へ鞦なるべく構ふべ

目市に何によらず四季の動をさて

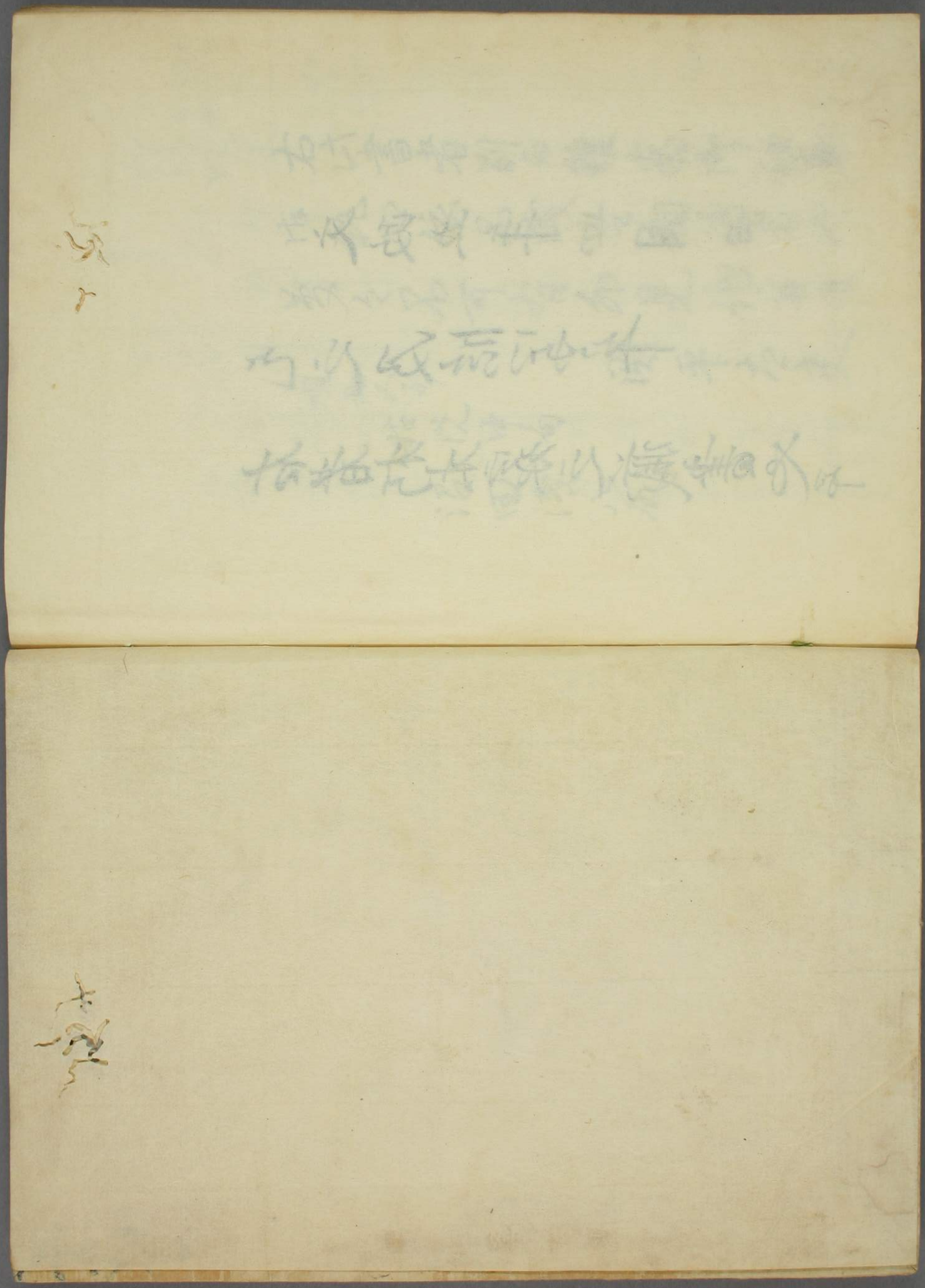
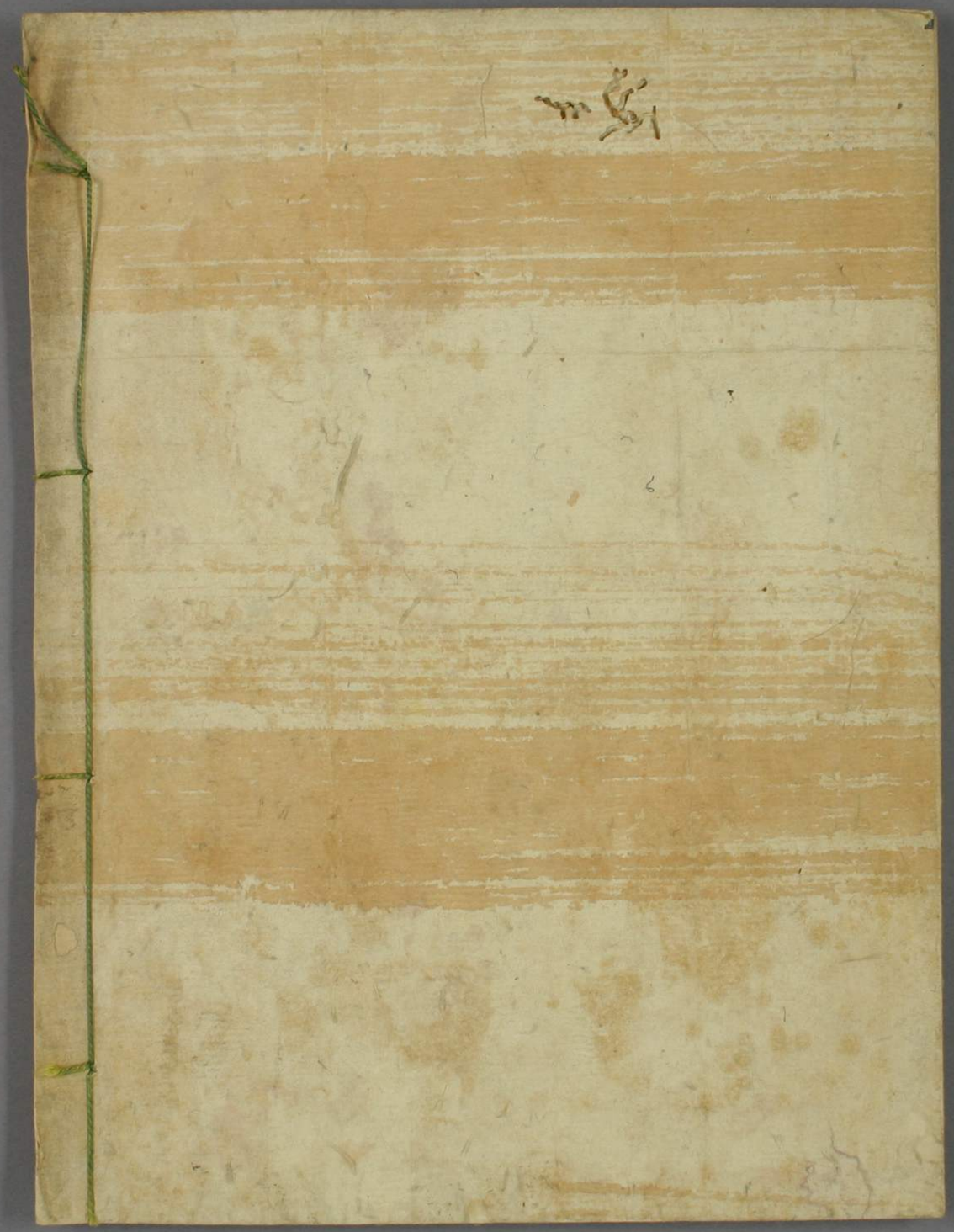
動事も一のの志見も初白大良

一有徳院様御用に付鞦杖い寸方縦く

かゝの木にて作升に仕越拵い竹大り



右件書者別而雖為御秘事
告執心依不淺令相伝者也
仍之為後日有所見他言候
岡平太夫

明和元子
姑洗中旬
沼田淺八郎

右者朽木家之藏書也
乞之及陪写年
文政五年四月日